The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ ゲーム読み物

ソニックの大冒険

第6章 ソニックをつかまえろ！大作戦

その日の朝。
「おっはよう！」
ニッキは、自分のクラスに入っていって、思わず「あれれ？」となりました。
いつもなら、担任のウィング先生が来るまで、もうみんな大騒ぎしている時間です。
紙ヒコーキを飛ばす者。前の晩、テレビで見た歌手の物マネをしてみせる者。それに、忘れた宿題を「頼むう〜、見せてくれ〜！」なんて叫んでる者、なんかがいるはずです。
ところが！
その日ばかりは、シ〜ン……というか。ジト〜……、っというか。
まるで、みんな元気がなく、クラ〜ク落ち込んでいるではありませんか。
しかも、そのクライ輪の中心には。
なんとなんと、いつも元気イッパイのエミーがいたのでした。
「ど、どうしたんだい、エミー？」
「ああ、ニッキ……。」
エミーの顔が、今にも泣きそうです。そして、
「これを、見て。」
そう言って、ひとつのタマゴを見せたのです。

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

「われら魔界が選びしムスメ、エミーよ。そなたに、われらの聖なるタマゴ、贈るものなり。よいか、心してわれら魔界の敵、ソニック・ザ・ヘッジホッグを呼び寄せるのじゃ。期限は、三日！　よいか、三日のうちに、ソニックを呼び出せ。……さもなくば。エミーよ。そなたの身に、大きな不幸がおとずれるものなり。」

　そして、「フワァ～ハハハハハハ～～～！」悪魔の笑い声が、教室中に鳴り響いたのでした。

「ね、ね、『不幸を呼ぶタマゴ』でしょう？」

　モニカとパティが、ニッキの顔をのぞきこみます。でも、次の瞬間、

「のわ～！」

となって、二人は思わずズッコケそうになりました。

「ちょっとちょっとぉ、ニッキったらぁ～？」

二人が、どわ～っとコケそうになったのもムリありません。

　ニッキったら。

　恐ろしさのあまり、立ったまま気を失っていたのです。しかも、ツツツ～～～！なんて感じに倒れはじめました。

「やだぁ～、しっかりしてよぉ、ニッキ～！」

　パティたちが、あわててニッキを支えました。

†

　いっぽう、教室の外では、

「ププッププフッ・・・！」

と、ひっしに笑いをこらえる声と、ププッププププ・・・！というオナラのもれる音が、同時に聞こえていました。

　笑うと同時に、オナラが出ちゃう。

　そうです、あの『今世紀最強の科学者』ドクター・エッグマンが、教室の中をうかがっていたのです。

　しかも、この日のエッグマン、なぜか郵便配達のオッサン、……いえいえオジサンのカッコウをしているではありませんか。

　となりには、ボディをまっ赤にぬった、まるでポストみたいなオムレッツをつれています。

　エミーに、あの『不幸を呼ぶタマゴ』を配達したのは、まさにこの二人にまちがいありません。

「くっくく・・・、どうじゃオムレッツ。わしのねらいどおり、ガキンチョどもが大騒ぎになっちょる。」

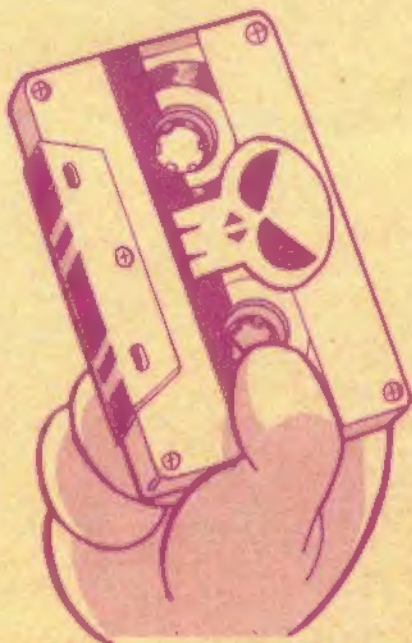
「だなや。」

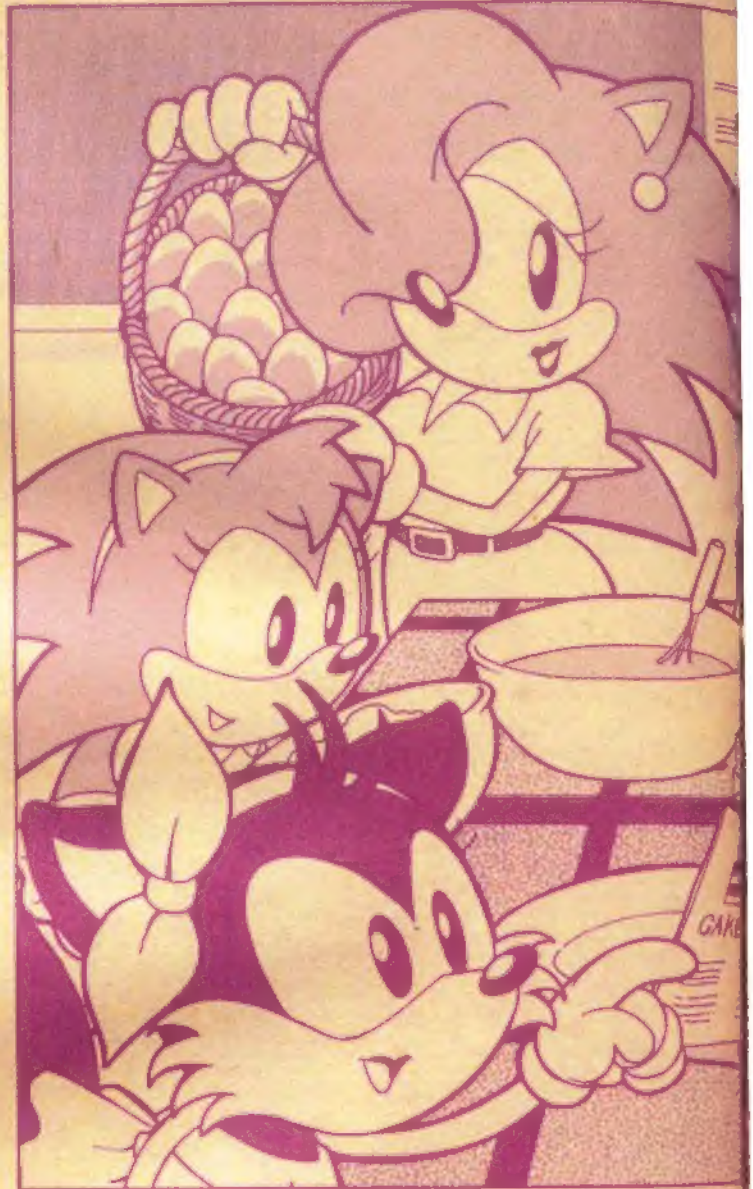
「あのエミーっつ～子は、みんなの人気者じゃ。あの子が、涙を見せれば、たちまちガキンチョどもが騒ぎ出す。」

「だなや。ソニック、現れてくれ！」

　オムレッツが、ドクターに調子を合わせるようにして叫びます。

「そうじゃそうじゃ。鼻たれ小僧も、ンコた

「なんだ、タマゴじゃないか。いったい、これがどうしたの?」
「それがね、フツーのタマゴじゃないの。」
いつも何でもかんでもクラ〜ク言うモニカが、この時とばかり、おもいっきりクラく二人の間に割って入りました。
「これはねぇ、「不幸を呼ぶタマゴ」なの!」
「ええ〜?」
さすがのニッキも、驚いて目をまん丸くしました。
エミーがベソをかきながら言いました。
「今朝ね。わたしのおウチに、特別郵便というので届いたの。ほら、このカセット・テープもいっしょ。」

そのテープには、怪しげなドクロのマークが書かれています。
エミーが、そのテープを出すと、みんながいっせいにザワザワしはじめました。
そうです。
ゴックン!
みんなは、たった今、このテープの恐ろしい声を聞いたばかりだったのです。
ニッキは、キンチョーのあまり、ノドの奥でツバを飲みこみました。
ニッキにしても、もちろんそんなテープ、聞きたくありません。
でも、目の前のエミーが、涙をイッパイためているのを見ると、自分だけ聞かないわけにはいきません。
「はっはっはは……。どれどれ、きっと誰かのいたずらだよ〜!」

なんて。せいいっぱいカラ元気を出して、テープをカセットデッキの中にセットしました。
エミーもモニカも、それにパティやリトル・ジョンまでもが。
「あわわわ〜〜〜!」という感じに、耳をふさぎます。
はたして!
テープからは、ドワワワ〜〜ン!などというクラ〜イ音楽が流れ出し。
そして、「キッヒヒヒ〜!」という魔女の笑い声が響きはじめました。
そしてそして!
続いて、悪魔のようなおどろおどろした声が、低く聞こえてきたのでした。

た。

「そうです。今日の社会科の授業は、みんなでケーキを作ります！」

「いやっほ〜！」

まず一番に叫んだのは、リトル・ジョン。

そして、今までクライフンイキが立ちこめていた教室が、たちまちガヤガヤと騒がしくなっていきました。

「でも、先生。どうして、社会の時間にケーキなの？」

と、パティ。

「は〜い、いいシツモオ〜ン！」

まるで、「ピンポ〜ン！」って言う感じに、ウィング先生が答えます。

「いいですか、みなさん。まずみんなでケーキを作ったら、それをいくつもに切ります。」

「いくつもに？」

「そうよ、ニッキ。そして、今度は、班に分かれて、プレゼント先をどこにしようか話し合うのです」

「ちょっと、ウィング先生。」

「はい、リトル・ジョン！」

「ケーキを作っても、ボクたち食べられないんですかぁ？」

「うふっ。アンシンなさい。ケーキはたっくさん作ります。」

「やったぁ〜！」教室のみんなが歓声をあげました。

「それで、プレゼント先っていうのは？」

と、エミー。ウィング先生の登場で、もうすっかり『不幸を呼ぶタマゴ』のことなんか忘れてしまってるようです。

「はい、それもいい質問よ。いいですか？ケーキはふだんお世話になっている町の公務員さんにプレゼントするのです。」

「公務員さん？」

「そう。ほら、この間、自分たちの周りにはたっくさんの公務員さんがいるっていうお勉強したでしょう？」

「やったやった！区役所の人とか、おまわりさん、それに、道路をお掃除してくれる人たち！」

「郵便屋さんも、そうだぞ。」

れ小僧も、みんなみんなエミーちゃんのために騒ぎ出す！
「ソニック、現れてくれぇ〜！ だなや。」
「だなやだなや！」
エッグマンは、思わずオムレッツの口マネをしてしまい、「あん?」と口に手を当てました。
「オッホン！ とにかくじゃ。このヘッジホッグ小学校のバータレどもが、みんなでソニックを呼べば。……くっくっく。あのカッコつけしいのソニックのこと。ヤツめ、かならずや……。」
そう言って、エッグマン、前髪をかき上げて（エッグマンは、前髪なんてナイ！）、ソニックのカッコウをマネて、
「誰か、オイラを呼んだかい?ドッカ〜ン！ なぁ〜んて、ノコノコ現れてくるに決まってるわい！」
「ドゥワ〜ッハハハハ〜〜〜！」あとはもう、高笑いとオナラの大バクハツです。
「くう〜〜〜、たまらんわだなや〜〜〜〜！」
オムレッツは、逃げ出すこともできずに、鼻を押さえて立ち込める黄色いケムリを手で追い払いだしました。
それにしても、このコンビ、ソニックを捕まえるためとはいえ、タイヘンなことを考え出してくれたものです。
なにしろドクター・エッグマン、ソニックの超光速エネルギーを手に入れるためなら、手段を選びません。
かわいそうなエミーは、そのギセイ者第一号となってしまったのです。
と・こ・ろ・が！――教室では。

ウィング先生登場

「きゃ〜、エミーちゃん。気がきくわねぇ〜！ 先生、今日は、タマゴいくつあっても足りないなぁ、って思っていたのよぉ〜。」
クラ〜クなってた生徒たちが、パッと明るくなる感じに、担任のウィング先生が現れました。
そして、エミーの持ってたタマゴをひょいとつまみあげると、手に下げていたカゴの中に入れてしまったのです。
「ああ〜〜〜！」
みんなが、いっせいに声を上げたのもムリありません。
そのカゴの中には、なぜかタマゴが山盛りになっていたのです。これでは、「不幸を呼ぶタマゴ」がいったいどれなのか見分けがつきません。
「ウィング先生。それ、悪魔のタマゴなんですよォ！」
ニッキが、あわてて言いました。
でも、超アッカルイので有名なウィング先生は、そんなことちっとも気にしません。
「うっふふ……。悪魔だって、きっとケーキは大好物のはずよ。「不幸を呼ぶタマゴ」も、大喜びでケーキになってくれるわ！」
「ええ〜、ケーキ?」
落ち込んでいたエミーが、思わず叫びまし

ニッキたちは、タマゴを割ったり、ミルクをまぜ合わせたりと、大急がし。
そのため、この郵便屋さんコンビに、だれ一人として気がつく人がいません。
「よしよし、やっとタマゴのカゴにたどり着いたぞ。」
まんまと、タマゴのカゴのところまで忍び寄ったエッグマン、オムレッツと顔を見合わせて、ニンマリです。
「はて、どれが、わしがエミーちゃんに配達したタマゴかいの?」
「だなや?」
「不幸を呼ぶタマゴ」を作り出したエッグマンとて、こうたくさんタマゴがあったのでは手がでません。
いえいえ、本当のところは、手を出して、しかもよせばいいのに、コンコンコン!

拾い上げた一つのタマゴで、自分のアタマを軽くたたいてみたのでした。
と、次の瞬間!
ボッカァァ〜ン! タマゴが、大バクハツ。
「ギャヤヤ〜〜!」
あわれエッグマン、大きな顔が黒コゲになってしまったのでした(みごと、「不幸を呼ぶタマゴ」を探し当てたんだね)。
「ああ〜! 郵便屋さんが、こんなところで黒コゲになってる!」
ニッキが叫びました。
するとウィング先生が、大きな目をパチクリして言いました。
「やだぁ〜、郵便屋さんったら。まだ、ケーキできてないんですのよぉ? 待ち切れなかったのかしらん?」
それには、エッグマンとオムレッツ、さすがに「どわ〜!」となって、ズッコケてしまったのでした。
さて!
なかなか手強い(?)ウィング先生の登場で、野望に燃えるドクター・エッグマン、さらに! ……さらに! 次なる非常手段に出ることにしたのでした。

つづく

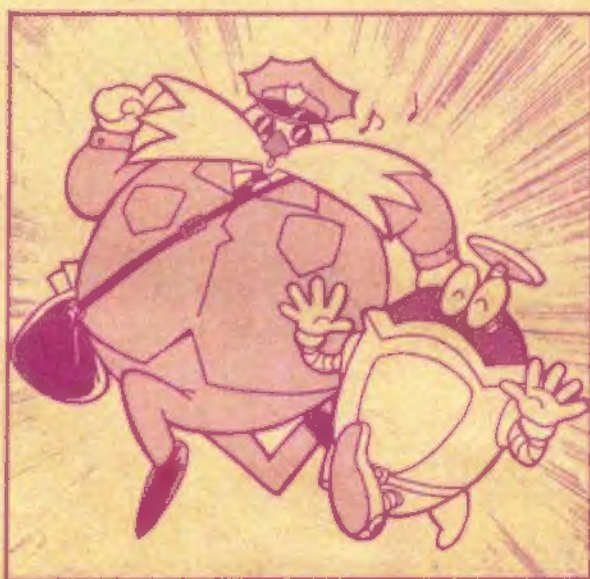
こんなことでへコたれるエッグマンではなかった…?

みんなが口ぐちに言いました。
ウィング先生は、そのたんびに、
「ピンポ〜ン! ピンポ〜ン!」
と言って、みんなを笑わせます。
そして、パティが、「なっるほどぉ〜!」という感じに言いました。
「そっかぁ〜! それで、社会科の授業なんだぁ〜!」
すると、ウィング先生をはじめとする教室のみんなが、「ピンポ〜ン!」と大きな声で叫び。
そしてそして、さっそくウィング先生を中心に、巨大なケーキ作りが始まったのでした。
ケーキの材料には、なんといったってタマゴとミルクは欠かせません。
ニッキたちは、カゴのタマゴを次つぎに割って、ミルクの入った大きなボールの中に落としていきました。

▲ウィング先生

それにしても、このウィング先生の、なんと超明るいこと!
ニッキやエミーたちは、いつも元気イッパイ、時どき、子どものニッキたちよりはしゃぎまくっちゃう、そんなウィング先生が大好きです。
しかも、先生の授業は、とってもユニーク。ケーキ作りをしているうちに、町の公務員さんのことが分かっちゃう、なんて。
ホント、サイコーです。
でも。この先生の登場は、明らかにドクター・エッグマンにとっては計算ちがいというものでした。

忍者作戦大失敗!

「ううう〜〜〜、な、なんだなんだ、なんなのだ、あの超アッカルイ先生は!」
エッグマンが、くやしさのあまり、ユデタマゴのように頭から湯気を出しています。
その隣で、オムレッツが思わず、
「でも、カワユイ先生だなや。」
ポツリとつぶやきました。それで、エッグマンまで、
「だなやぁ〜〜〜!」
と、つられて言ってしまったのでした。
「ええい、バカを言わせるでないわ、オムレッツ! あのような、若くてカワユクて、一度ぐらいお手てつないで公園をシャンポしたい

なぁ〜、という先生が現れたからといって、みすみすソニックを取っつかまえるチャンスを逃すわけにはいかんぞ。」
「だなや。」
「それ、われらのタマゴを取り返すんじゃ!」
「だなやぁ〜!」
さあ、それからは、エッグマンとオムレッツの忍者作戦の開始です。
郵便屋さんのカッコウのエッグマン、そして、ポストのようなオムレッツ。
二人は、ケーキ作りに夢中になっている教室に、こっそり忍び込んでいきました。
「ええ……、郵便でござい。……ゆぅ〜ぴ〜ん……!」
「ポストだなやぁ〜。」